

戦没オリンピック

体操日本の礎

戦後80年



1936年のベルリン五輪の頃に撮影されたと思われる有本彦六さん（日本体大オリンピックスポーツ文化研究所提供）

1936年のベルリン五輪に体操日本代表として出場し、太平洋戦争に出征して29歳で戦死した有本彦六さんについて、母校・日本体育大学の関口雄飛助教（29）らが約1年半かけて調査を行い、その生涯をまとめた論文を完成させた。「体操ニッポンの礎を築いた功績を知ってほしい。関口さんは同い年で戦火に散った「戦没オリンピック」に思いをはせている。（竹田章紘）

生涯を論文に
功績知って



有本彦六さんの生涯をまとめた関口助教（東京都世田谷区）

36年大会出場 有本さん

「東京」目指し

「東京」目指し
同大オリンピックスポーツ文化研究所で助教を務める関口さんが、同大の福井元准教授（49）とともに調査を始めたのは、2023年末。これまで生涯にわたる足跡やその功績をあまり伝えられてこなかった有本さんが登場する文献や書籍、当時の新聞記事を集めたほか、関係者らを訪ねて回った。

台湾沖で沈没

その思いは37年に始まった日中戦争で打ち砕かれた有本さんは、33年に同大の前身・日本体育会体操学校に入学。器械体操部に入り、「片手倒立」を日本で初めて完成させた。20歳で初出場を果たしたベルリン

期もはつきりとはしないが、39年9月には母校の日本体育会体操学校で、後進の指導にも熱を入れ始める。

指導者生活も長々とは続かなかった。43年7月、召集を受けて海軍に入った。面会に来た女子の教え子から、部員の練習風景の写真が収められたアルバムを贈られた際、有本さんはこう伝えた。とされる。「教えるべきことは全部教えた」

前自身が女子体操の道を開拓していけい」

軍歴などの資料では、有本さんは45年4月、乗っていた掃海艇が台湾北方の海上で攻撃を受けて沈没、戦死したとされる。

主な弟子活躍
戦後、有本さんの主な弟子たちは次々と体操界で活躍をみせる。女子選手は全

日本選手権を何度も制した。戦前に有本さんの指導を受けた竹本正男氏（1919〜2007年）は、52年のヘルシンキ五輪から3大会連続でメダルを獲得。中京大の監督になった深井一三氏（1922〜92年）は、72年のミュンヘン五輪金メダリストの笠松茂さん（78）らを育てた。

「訳語に忠実なあまり、形ばかりを当てるはめようとする日本の指導や練習は反省すべきだ」。深井氏が残した書籍の中には、有本さんからの教えが残されていた。有本さんが選手だった当時、日本はまだ体操黎明

「パロン西」ら38人研究足りず

「戦没オリンピック」を巡る調査や研究は、国内で十分に尽くされているとは言えないのが現状だ。

期で、翻訳された外国の指導書を試行錯誤しながら再現する練習が主だった。ベルリン五輪で世界の体操を目の当たりにした有本さんは、教え子に自主性の大切さを説き、自ら考えることを促したという。

関口さんは「情熱を注いだ体操や愛する人々との日常を戦争に奪われた有本先生の無念さはわかり知れない。功績がしっかり継承されておらず、戦後80年を生きた私たちがまさに今、担うべき仕事だと感じた。今後も可能な限り戦争に関する継承作業を行いたい」と話す。

研究を行う曾根幹子広島市立大名義教授（スポーツ史）によると、戦争に関連して亡くなった日本人の戦没オリンピックは、過去の調査や遺族らへの聞き取りを基に38人いるとされる。1932年のロサンゼルス五輪の馬術で優勝し、「パロン西」の愛称で活躍した西竹一さんら後世に知られる選手もいる。

曾根さんが2016年に本格的な研究を始める前は、公的機関などによる統一された名簿はなく、戦没オリンピックの全体像もあまりわかっていなかった。現在も全ての選手について十分な調査ができていないという。今回の有本彦六さんに関する研究について、曾根さんは「大変意義のある研究だ。戦後のスポーツ発展の礎を築いたのが戦没オリンピックたちで、今回のようにゆかりのある大学の研究者らが調査を行うなど後世に残す努力をしてほしい」と話した。